

帚木三帖の成立と唐代小説鶯鶯伝・任氏伝との関係

郭 潔 梅

序

『源氏物語』の帚木三帖を開くと、問題の多い巻頭文が目に入る。この巻頭文は桐壺の巻を受けるものとして相応しくないという指摘が、『源氏物語』の執筆順序を巡っての大論争を引き起こした。結論は未だに出ていない。それはさしおいて、筆者は、今井源衡氏の、帚木の巻頭文は、白樂天の親友である元頴が書いた「鶯鶯伝」の「影響下」であって、直接的或いは間接的に翻案、変形されたものであるという指摘に賛同し、驥尾に付して、帚木三帖の構成構想、空蟬の物語の中で文使いとして活躍していた小君と鶯鶯の侍女紅娘の人物像との類似、空蟬

の、自ら男の寝所へ行った鶯鶯と違って、男の振るった暴力に反抗した任氏との類似、空蟬の物語の後ろに対蹠的な性格や人柄を与える夕顔の物語が継いでいるなどのことから、帚木三帖が唐代の伝奇小説を受容する特徴をまとめてみようとする。

なお『源氏物語』の本文引用は新潮日本古典集成により、伝奇小説は『太平広記』（中国の人民文学出版社）による。漢文和訳は新釈漢文大系「唐代伝奇」を参考させて頂いた。

それでは、まず元頴及びその「鶯鶯伝」の紹介から始める。

元頴及びその「鶯鶯伝」について

元頴（七七九〜八三二）は、字微之、河南省の出身である。

元和（八〇六）の初め、制策に依じて、科擧試験の首席に及第した。それから中書舍人・工部侍郎などを歴任し、長慶二年（八二二）宰相に昇進し、新・旧『唐書』ともにその伝記が載せている。詩人として誉れ高く、『元氏長慶集』六十巻が残されている。白楽天と多くの詩文を唱和し、その詩風は「元和体」と呼ばれる。元頤は、伝奇小説を「鶯鶯伝」一篇しか書かなかつた。名声が高く文才があるためか、元頤の白叙伝である（宋の王銍の考証・『唐代叢書』附説）からか、上梓されると、白楽天の「長恨歌」に劣らず愛説されて、並々ならぬ持てはやされていた。唐はもとより、宋に入ってから

士大夫極談幽玄、訪奇異、莫不奉此為美談。至於婚嫁女子、皆能調說大略（註）士大夫は、好んで幽玄を語り、奇異な話題を探し求め、「鶯鶯伝」を美談にしない人はいない。『茗』。妓女さえもその概略を語ることができる。

というようであった。「鶯鶯伝」は、小説として読まれるだけではなく、速やかに劇曲化された。宋には、趙德麟が「元微之・崔鶯鶯商調蝶恋花詞」（先掲『侯靖録』）という鼓詞（曲芸）を作り、金には、董解元の『絃索西廂』があり、元には、王実甫の『西廂記』、関漢卿の『統西廂記』がある。明代には、李日華や陸天池の『南西廂』などが現れた。その他、翻案や「統」、

「後」類のものは可成りある。現在に至って、全中国では、『西廂記』を伝統曲目にしない劇団はないと言つてよい。『西廂記』はいち早くヨーロッパ諸國に訳された。寛永十六年（一六三九）以前に日本に伝来し、所蔵された。唐代伝奇小説作家の中では、作品の数こそ少ないが、評価が高く、後世に頗る大きな影響を及ぼした人は元頤ほかにいない。「鶯鶯伝」は、『唐代叢書』などに「会真記」と名付けて、『太平広記』巻四八八に収められる。その梗概は次のようである。

貞元年中、張生という書生がいて、容貌温美、品性端正な人である。二十三歳になるが女性を近づけなかつた。ある日、張生は、普救寺を遊び、崔夫人母子に出逢つた。話してみると、崔夫人は、張生の母方の叔母に当たると分かつた。その頃軍人の騒乱があつて、崔夫人は甚だ懼れたが、張生は、軍人に知り合いがあるため、お陰で無事に保護された。崔夫人は、張生に感謝し、招宴した。張生は、臨席した崔夫人の令嬢鶯鶯を見て、すっかり惚れ込んでしまった。それから侍女紅娘に頼み、春詞（愛情詩）二首を贈つて、思慕心を打ち明けた。鶯鶯は、張生の詩を読んで

待月西廂下、迎風戸半開、隔牆花影動、疑是玉人來
西廂の下に月を待ち、半ばは戸を開け風迎ふ。垣根に花の影ゆ

らく、恋しき人の米ませるか。

という詩を返した。張生は、喜びかつ驚き、指定したと思われるところで待っていた。やがて鶯鶯がやってきたが、彼女は、きちんとした身なりをして真面目な顔つきで張生の無礼を責め、それからさっと帰ってしまった。張生は、長いことぼんやりして、すっかり諦めた。数日後のある夜、張生が一人で寝ていると、紅娘は、夜着と枕を携えて令嬢鶯鶯を支えてきた。鶯鶯は、張生と一夜を共にして、夜明け前に帰っていった。それから西廂に寝ることほとんど一月あった。間もなく張生は、西安に行くことになり、暫く別れた。その後一回戻ったが、そこへ俄に試験の呼び出し状が届いたため、急いで出発した。張生は、再び上京し、試験に落ちて、京に止まった。その後鶯鶯に手紙を贈り、鶯鶯は、張生への返信に

君子有撥琴之挑、鄙人無投梭之拒―琴の調べにことよせてのお誘いに、梭を投げ出して拒むほどの心強さがない。

と書き、自らの不謹慎な態度を反省していた。張生は、鶯鶯の手紙を友人に見せた。二人のうわさは時の人々の口の端に上るようになった。親友の楊巨源は、「崔娘詩」を題とする一首の絶句を作り、河南の元稹は張生の作った「会真詩」三十韻に和して詩を作った。一年余り過ぎて、鶯鶯は嫁ぎ、張生も嫁を迎

えた。その後張生は、偶然に鶯鶯の住居近くを通ることになったので、鶯鶯の犬に頼んで、従兄として会いたいと申し入れた。鶯鶯はどうしても姿を見せない。張生は、それを怨めしく思い、顔色にも現れるほどであった。鶯鶯はそれを悟ると、

自從消瘦減容光、萬轉千廻懶下床。不為旁人羞不起、為郎憔悴却羞郎―やつれし今は見るかげもない。身を動かしてベッドを下りるさへものうし。あだし人の目を羞ぢて起きざるにはあらで、君故にこそやせ、君なればこそはづかしけれ。

という詩文をわたして、とうとう逢わなかった。それから数日後、張生が旅立とうとする間に、鶯鶯は、また、棄置今何道、当時且自親、還持時意、憐取眼前人―棄てられし身に今何をかたまふ。そのかみのことはわれ自らの恋にこそ。かつての温きみ心もち給うて、お身近き人をこそ愛で給へ。

という詩文を寄せて、別れの挨拶とした。貞元の年の九月、執事李公垂が張生の家に泊まった。その時またこの話が出た。李公垂は、世にもすぐれた稀なことだと言い、「鶯鶯歌」を作って世に伝えられた。

「鶯鶯伝」は、いつ日本に伝来したのか、確実な記載は見え

ない。田辺爵氏は「鶯鶯伝」が元禄の歿時より四十年後（八七
一）ころ伝來したのであると推測し、目加田さくを氏は、
「鶯鶯伝は見存書目録には見えないが、唐の代表的艶情伝奇で
あるから或いは留学生の口伝承があったのではあるまいか」と
述べていた。「鶯鶯伝」の影響は、『伊勢物語』の「狩の使」に
初見し、田辺爵氏や目加田さくを氏、上野理氏や片桐洋一氏の
論著に言及された。だが、源氏の物語に「鶯鶯伝」の影響が見
えないことは、かつて不思議に思われていた。

帚木三帖の構成構想と「鶯鶯伝」

光源氏、名のみこととしう、言ひ消たれたまふ咎多かな
るに、いとど、かかるすきことどもを、末の世にも聞き伝
へて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひけるかくろへ
ごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさよ。さる
は、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよ
びかにをかしきことはなくて、交野の少将には笑はれたま
ひけむかし。

という帚木の巻頭文と「鶯鶯伝」の巻頭との類似について、今井
源衛氏は、次のように述べている。

張生が二三歳まで女性を知らなかったという点は源氏とは
違ふようだが、そのほかは、張生と源氏がともにきまじめ
な人間であること、しかし、一旦自分がこれとは思つた女
性には執念を燃やすという点が共通である。文中の「登徒
子」を交野の少将に置き換えれば、「鶯鶯伝」を少しひね
れば、そのまま帚木巻頭になりそうである（先掲論文）。

確かに、光源氏の、一旦自分が「これは」と思うと、執念を
燃やして止まぬ性格が張生に似ているが、源氏の雨夜の品定め
に臨む態度も張生に似ていると考える。長雨の降り続く夜に、
光源氏は、内裏で友人と雑談していた。他の三人は、先を争つ
て語り合っていたが、光源氏だけは、落ち着いた調子であわせ
て、「白き御衣どもの、なよよかなるに、直衣ばかりを、しど
けなく着なし給ひて、ひもなどもうち捨てて、そひ臥し給へる
御火影」、まことにすばらしい。ここは、張生の、友人や仲間
と酒宴に臨み、「他人皆濁々拳々、若将不及」―他の人は、み
なはしやぎ出しさわざまわり、彼だけは「容顏而已。終不能乱」
―じつとおちついて調子をあわせて、ついで心の乱れは見せな
い態度と似ているようである。

帚木三帖では、光源氏の紹介から始まり、「まだ中将などに
ものしたまひし時」の出来事―女性論・空蟬・夕顔の物語を追

想する。雨夜の品定めは独立性が強く、空蟬の物語とあまり関係がないと思われる。だからこの異質的な部分を空蟬の物語と一卷にまとめるのは、あくまで異様に思わせる。しかしこの異様な構成構想を「鶯鶯伝」と較べてみれば、両者の間にどこことなく似ているところがあると思わせられる。

「鶯鶯伝」は、張生という二十三歳の書生の紹介から始まり、それから張生と鶯鶯との愛情物語を追想している。張生は、鶯鶯と別れてから、鶯鶯の手紙を友人に見せて、鶯鶯とのことを語る。友人たちは、珍しいと思ひ、鶯鶯を巡ってそれぞれ詩を作った。結局、だからと長い詩文で締めくくり、特異な構成でもある。帚木三帖の構成を「鶯鶯伝」と較べてみると、以下の類似が見える。

- 1 男の主人公の紹介から始まる。
 - 2 まだ若い時のことを追想する。
 - 3 何れも男同士四人が女性のことを論ずる。
- 「同」があれば、「異」もある。男主人公の紹介については、今井源衛氏の詳細な論証があるので、省かせて頂きたいが、他の相違を見ようとする。

1 追想した内容

「鶯鶯伝」は、およそ三、四年前、張生が二十一、二歳、ま

だ試験に及第していない時鶯鶯との愛情物語を追想している。帚木三帖は、すでに大将になった源氏の、「まだ中將などにもしたまひし時」のこと―女性論・空蟬の物語・夕顔の物語を追想している。張生は、鶯鶯とだけ交際していたが、光源氏は、空蟬だけではなく、夕顔とも交際していたのである。

II 女性論に参加したメンバー

「鶯鶯伝」では、女性を論じた四人は実在した詩人グループのメンバーである。張生は、元頤が託した人物であり、他の三人も実在した著名詩人である。楊巨源（八〇〇年に在世）は、元頤と同時代の人で、字景山、浦中（山西省）の出身である。国子司業となり、詩を以て後進を導く。元頤のことは省かせて置く。李公垂（八四六年まで在世）は、李紳といい、潤州無錫の人である。元頤と同じ年に科擧試験に参加し、進上に及第して、翰林大学士である。仕途では、右拾遺より累遷し、唐の武宗の時右僕射・門下侍郎となった。雨夜の品定めに参加したのは、光源氏を始め、中將・左の馬の頭・藤式部の丞で、いずれも虚構人物である。

III 構成構想

帚木三帖は、光源氏の紹介をしてから女性論に入る。それから光源氏と中流階級の女性空蟬・夕顔との愛情物語が展開され

る。長雨の降り続いた夜に、源氏は、厨子から女性の手紙や交換した歌を取り出して、頭の中將に見せる。左の馬の頭や藤式部の丞も参加して来て、それぞれの経験談を語り合つて、長々とした女性論が展開される。

「鶯鶯伝」では、張生を紹介してから、鶯鶯との愛情物語を叙述し始まる。最後は詩人たちが書かれた詩句で小説を結ぶ。

両作品の構成構想について簡単にいうと、女性論から始まるのか、それとも女性論で結ぶのかの違いである。もし「雨夜の品定め」を空蟬の物語・夕顔の物語の後に廻したら、「鶯鶯伝」のだからと長引いた詩文で結ぶ構成と同じようになる。

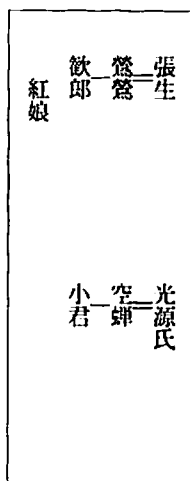
IV 両者女性論の形式・内容

もし「雨夜の品定め」を夕顔の物語の後ろに廻したら、形式上「鶯鶯伝」と同じような構成になる。しかし論じる形式が全く違う。「鶯鶯伝」では、楊巨源は「崔娘詩」と題する絶句を作り、元頌は、張生の「会真詩」に和して三十韻を作る。李公垂は、七言四十二句の「鶯鶯歌」を書き、その初めの八句が『全唐詩』に載つて世に伝えられる。雨夜の品定めは、光源氏や左の馬の頭・藤式部の丞・頭中將の四人が作った詩ではなく、それぞれの経験談であり、むしろ「紫式部日記」に記した同僚批評に似ている。

以上、帚木三帖の構成構想と「鶯鶯伝」との異同を比較した。が、実際、帚木の巻に登場した小君が果たした役割と「鶯鶯伝」の侍女紅娘の役目との類似は最も精彩である。

文使いとして活躍した小君と紅娘

紅娘は鶯鶯の侍女であり、小君は空蟬の弟である。二人とも愛情物語の中で文使いとして活躍していた人物である。中国では、「鶯鶯伝」が広く読まれていたうちに、紅娘を主人公にした読み物、戯曲の脚本が次々と書きつがれた。小君は、帚木に登場し、文使いとして源氏のために走り回った。小君の活躍ぶりを見て、「鶯鶯伝」の紅娘との類似に驚いた。ただ紅娘は侍女であるのに、小君は童である。この差異が現れる理由については後ろに廻して述べたい。分かりやすいために、まず両作品の相応する人物の系図を書いておこう。



右の系図には、源氏は張生と照応し、空蟬は鶯鶯と照応している。空蟬の弟小君は鶯鶯の弟欲郎と相応しているが、空蟬の物語に紅娘と相応する人物はいない。鶯鶯も空蟬も十歳ぐらい、優雅で、上品な弟を持っている。鶯鶯の弟欲郎は、「可十余歳、容甚温美」——十歳あまり、おとなしそうな可愛い子である。空蟬の弟小君は、「こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさまして、あて人」である。鶯鶯の弟欲郎は、招宴の時にだけ一度出場して、それきり顔を出さなかった。張生と鶯鶯との間に連絡していたのは紅娘である。

小君の役割について、これまで源氏の男色と見なすべきかどうかの論議があった。特に、

君、召し寄せて、「昨日待ち暮らししを、なほあひ思ふまじきなめり」と怨めじたまへば、顔うち赤めてゐたり」「いづら」このたまふに、しかしかと申すに、「いふかひなのこ

とや。朝まし」とて、またも賜へり

(帚木)

という段に見える「あひ思ふ」は、光源氏と小君との同性愛を仄めかしていると解釈されて、光源氏と小君との間に男色関係があったと思われている。一方、こゝは、同性愛を語る目的ではなく、小君の小柄な身体（た）の描写を通じて古典的な少年美を発見し、源氏の空蟬への未練を募らせるだけであるという見解もある。源氏と小君との間に同性愛関係があるかどうかを判断するには、この段の描写を見るだけでは結論が得られにくい。小君が源氏に召し仕えてから果たした役割を見なければならぬと考える。

Ⅰ 男主人公のひいきになる

源氏は、空蟬と一夜を共にしてから忘れることはできない。連絡のつてを求めするために、紀伊の守の家に見かけた空蟬の弟小君を思い出した。源氏は、紀伊の守に「かのありし中納言の子は得させてむや。らうたげに見えしを、身近く使ふ人にせむ。上にも我奉らむ」と言いつけた。小君が来てから、源氏は、「この子をまっはしたまひて、内裏にも率て参りなどしたまふ。わが御匣殿にのたまひて、装束などもせさせ、まことに親めきであつたたまふ」。源氏は、小君を政治勢力の拡充に使ったことはなく、姉のことを詳しく尋ね、上手に用を言い、手紙を

届かせる。源氏は、紀伊の守宅へ行って再び空蟬に逢いたいが、空蟬に断られた。そのため小君に

われは、かく人に憎まれてもならはぬを、今宵なむ、はじめて愛しと世を思ひ知りぬれば、はづかしくて、ながらふまじくこそ、思ひなりぬれ。

(空蟬)

と愚痴をこぼした。ここは、実に張生が鶯鶯の侍女紅娘に近くこととよく似ている。

張生は、鶯鶯に一度会って心を迷わし、何とかして思いを通わしたいと願った。つてがないので、張生は、紅娘に「為之礼数四、乘閑道其衷」―内々その侍女に贈り物をし、数回繰り返した。それから折を見て真意を打ち明けた。張生は、まず自分が幼い頃から人と調子を合わせぬ性分で、着飾った女性と同席したりしても見惚れることはなかったなどを紅娘に訴えていた。しかも

昨日一席閑、幾不自持、数日来、行忘止、食忘飽、恐不能逾旦暮、若因媒氏而娶、納采問名、則三数月閑、索我於枯魚之肆矣。爾其謂我何―先日、鶯鶯に同席してから感情を抑え切れないほどでした。歩いて道に迷い、食事をしてどこに行ったのか分からない。このようにしたら恐らく長く持ちますまい。もし仲人に頼みましたら、結納をしたり、

問名をしたりして手続きは三、四ヶ月かかる。その時自分はずでに干からびて干物屋で捜さなければならぬ。あなたはそのような私をどう思いますか。

と紅娘に強請った。源氏は、張生が紅娘に言った「待ちきれずに死んでしまった私をどう思うか」と違うことを話したが、やはり文使いの同情を求めて、強請っていた。

純粋な少年少女は、男の主人公に同情し、そのひいきになった。紅娘は、張生に「お嬢さまは文字がお好きで、時々詩句を口ずさみます」という情報を提供し、それから「あなた様は詩を贈って、その氣を引いてみてごらん下さい」と提案した。張生は、その提案を聞いて、大喜び、即座に存詞(愛情詩)を二首書いて、手渡した。

張生と紅娘とのやりとりは「鶯鶯伝」の紙面をさほど占めていないが、空蟬物語になると、作者は、細々と純粋な少年の走り回りを記していた。手紙はしょっちゅう持っていていき、紀伊守の不在を狙って、二度と源氏を導いた。

Ⅱ 女主人公に信頼されない

そのためか、文使いは女の主人公に信頼されない立場に置かれる。紅娘は、

崔之真慎自保、雖所尊不可以非語犯之、下人之謀、固難入

突—お嬢さまは真面目に慎み深く身を守っていらっしやるから、例え目上の方でも無理な言葉を使って押しつけることはできません。私のような召使いの計らいなど当然お聞きになりません。

と自ら鶯鶯に信頼されないことを言った。小君は、自ら言わなかったが、空蝉は、小君の持ってきた手紙を見ると

この子もいと幼し、心よりほかに散りもせば、怪々しき名さへとりそへむ、身のおぼえをいときなかるべく(平木)と考えて、幼い弟への不信感が伺われる。

小君は、紅娘を勝るほど活躍していた。だが、見逃してはならないことは、「鶯鶯伝」の文使いは侍女であるのに、源氏の文使いは空蝉の弟小君に変わった。物語の舞台が変わるから人物も変わり、平安朝では、侍女よりも男の子が自由に走り回るからではなからうか。同じ平安時代の和泉式部と帥宮との間に和歌の交換を伝え届けるのは、いつも親主に召し任えた童であったし、「伊勢物語」の「狩の使」にも「童」が登場した。「鶯鶯伝」の

張生臨軒独寝。忽有人寤之。驚嘆而起。則紅娘斂衾携枕而
至。撫張曰至矣。至矣。

という段が『伊勢物語』の「狩の使」の

女、人をしづめて、子ひとつばかりに男の許に來りけり。
男はた寝られざりければ、外の方を見出して伏せるに、月の朧なるに、小さき童をさきにたて、人立てり。

と書き直された段にも「小さき童」がいた。この「童」は、活気なく、静止的である。空蝉の物語になると、小君は可愛い少年に変わり、眼前に見えるように生き生きと活躍していた。これは、『伊勢物語』と『源氏物語』とは同次元の受容ではないことを説明し、源氏物語が伊勢物語から進化した一例と言えまいか。静止した「童」から活躍していた少年への変化をみると、マリウスIIフランソワ・ギューヤール氏の比較文学論を思い起こした。源泉研究は、

一つの個性を破壊するどころか、それを発揚するものであり、それを明らかにすることは、最大の作家よりよい理解に達することであり、またしばしばかれらに対する感嘆の念を一層深めることになるのである。

空蝉・夕顔の物語の主題と「任氏伝」

「狩の使」が種々の面から「鶯鶯伝」の影響を受けている。最も重要なのは、女性が自ら男性の所へ行ったシーンであろう。

このシーンがないから帚木三帖を空蟬の物語と「鶯鷺伝」と結びつけなかったかも知れない。鶯鷺は、自ら男の寝所へ行ったから張生に棄てられると知って、

始乱之、終棄之、固其宜矣、愚不敢恨——始めから道ならぬ恋でしたもの、ついに棄てられるのも、もともとやむを得ないことで、いままさら恨みは言えませんが。

と言った。これは「鶯鷺伝」が後世に残した教訓でもある。紫式部は、この教訓を汲み取ったか、空蟬を、自ら男の寝所へ行かず、任氏のような節操を守る女性に書き直した。

白楽天の「任氏行」の将来や「和漢朗詠集」にみる「写得楊妃湯後鬢、模成任氏汗米唇」という詩句や平安朝一流漢詩人の大江匡房が書いた「狐媚記」にみる「任氏為人妻到於馬嵬、為犬被獲、或被鄭生業」(『本朝文粹』)等の詩句から「任氏伝」が平安朝に将来されただけではなく、広く読まれていたことが分かる。帚木の巻の、みんなが寝静まった後、源氏は、障子の向こう側にある空蟬の寝所に忍び込んだ。空蟬の、「この人の思ふらむことさへ、死ぬばかりわりなきに、流るるまで汗になりて」と抵抗した場面は「任氏伝」の「任氏力竭、汗若滿雨——任氏は力尽き、汗は雨に濡れたようにびしょびしょであるという場面を踏まえていることは周知のことである。

暴力に抵抗し、節操を守ろうとする空蟬の物語が終わって、全く正反對な性格——いとあさましく柔らかに、おほどきて、もの深く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたるもの、柔和で無邪気な、源氏の言うままに某の院について行って、死んだ夕顔の物語が継いで、「任氏伝」の作者沈既済が提唱した「遇暴不失節、殉人以致死」という理想的な女性像が帚木三帖に映された。光源氏の眼前に現れた夏の空蟬は権勢を恃み、暴力を振るった存彦に必死に抵抗して、夫を裏切ることなく夫と共に去った。秋の夕顔は愛する人に従って死に至る。作者は、任氏の、

「遇暴不失節」——暴力に出くわしても節操を失わない一側面を利用して、空蟬の物語を語り、任氏の、「殉人以致死」——という一側面を夕顔の物語に利用していると思われる。二つの物語は、それぞれ任氏の性格の一側面を強調しているから、潜在的な繋がりを持っている。そのため、「帚木」の並一を「空蟬」に、並二を「夕顔」にしていたのはなからうかと推測される。

空蟬が源氏の暴力に抵抗する場面は「任氏伝」を踏まえていると言われるが、任氏は、夫の友人盗が押った暴力にあくまで抵抗し、最後の一线を越えなかった。しかし空蟬は、忍び込んで追ってきた源氏に抵抗したが、抵抗しきれず、ままたらぬ一

夜を共にした。抵抗したと言っても、節操は守らなかつた。一夜明けて、空蟬は、「かくうき身のほどのさだまらぬ、ありしながら身」を意識して、再び源氏と逢うことをこわつた。このような構想は、「任氏伝」の、峯の、任氏の態度に敬服して止めた展開と違い、特に関屋などの後日談は、「鶯鶯伝」の構想に戻つたと思われる。

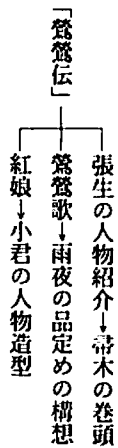
というのは、「鶯鶯伝」の張生は、従兄として結婚した鶯鶯に会いたいと申し入れたが、鶯鶯は、詩文をわたしたただけで、どうしても姿を見せなかつた。それから数日後、張生が旅立とうとする間に、鶯鶯は、再び詩文を寄せて、別れの挨拶とした。一方空蟬は、その年の秋に大と任国に下る。源氏は、内密に特別に餞別を贈り、送別の歌をも贈つた。空蟬は小君に託して歌だけは返した。数年経って、空蟬は、大に従つて任果てての帰路、逢坂の関で源氏一行に出逢つた。源氏は、昔の小君、今の右衛門を介して空蟬に歌を送つた。源氏が石山より帰る日、二人は再び消息を交わした。空蟬が人妻として元の恋人と歌を贈答する構想は「鶯鶯伝」と共通している。

しかし空蟬の物語の最後はまた「鶯鶯伝」と違う展開になつた。鶯鶯は、張生に詩をわたしてから音信を絶つたが、空蟬は、常陸介が亡くなり、継子の好色な下心を嫌つて出家し、衣食住

とも源氏の世話になつた。このような結果はまた「任氏伝」の峯が任氏に敬服し、ずっと世話してあげるような構想にもどつたと考えられる。

まとめ

以上、帚木三帖の巻頭文が「鶯鶯伝」の巻頭文の影響を受けていることを前提に、帚木三帖の構想、文使いとして活躍していた小君の人物像の造型と「鶯鶯伝」との関わり、「任氏伝」の導人による空蟬の抵抗場面、空蟬の終わりに夕顔の物語が継いだ理由を検討した。帚木三帖は、唐の伝奇小説からいろいろヒントを得て構想してきたと思われる。唐の伝奇小説の影響を受けていると言っても、ある一篇小説の全部ではなく、ある人物の造型とか、ある物語の主題とか、ある場面の描写だけとかである。しかも一つの物語は、一篇の伝奇小説から影響を受けるとは限らず、二篇か数篇から影響を受ける時もある。簡単にまとめると次のようになる。



「任氏伝」——任氏の「遇暴不失節」↓空蟬の抵抗場面

「任氏の「殉人以致死」↓夕顔の性格

「霍小玉伝」——死んだ小玉の祟り↓夕顔の怪異表現

右のまとまりを見て、空蟬の物語は、同時に「鶯鶯伝」と

「任氏伝」を受容し、夕顔の物語は、同時に「任氏伝」と「霍

小玉伝」の影響を受けていることが分かる。だから帯木三帖は、

一篇の伝奇小説から受容したのではなく、多次元の受容である。

源氏物語の作者は、数篇の小説から必要な部分だけを取り上げ

て、物語を創造して、平安舞台に表現したのである。

数篇の傑作からそれぞれ精彩な所だけをとると、成功もあり、

失敗もあろう。「鶯鶯伝」にせよ、「任氏伝」にせよ、何れも唐

代の一流の詩人が書き上げた傑作である。「鶯鶯伝」は、張生

の人物伝のような小説であり、その巻頭文の影響を受けて紹介

された源氏は、風采がよく、性格が穏やかである。「任氏伝」

は、任氏の伝記のような小説であり、任氏の、「遇暴不失節」

という性格の側面を取り上げて空蟬を成功に作るうとすれば、

無礼な草金の影が源氏に落とすはずである。そのために、雨夜

の品定めに臨んだ時の風采がよく性格の穏やかな源氏は、紀伊

守の邸宅に行くくと豹変してしまふ。彼は、旁若無人に人妻空蟬

を自分の部屋に抱えこもうとする。侍女に見られても、勢力を

持み、「暁に迎えに来い」さえ言ったのである。女の主人公の

個性を強調すれば、男の主人公も変わるはずである。もし男の

主人公が変わらなければ、光源氏は、一つの人格として描かれ

ていないとか、その心理の動き方は、何の連絡も必然性もない

とか、荒唐無稽であるとか、と言われる可能性がある。

最後に一言付け加えたいが、帯木三帖が桐壺巻に継いで配列

されるのは理解しがたいようであるが、白楽天の「長恨歌」の

影響を受けて語られた桐壺の巻に、その親友である元稹の書いた

「鶯鶯伝」を受容した帯木三帖を書き続いたと言えば、納得

できるようにするのはなからうか。

(一九九七年十月於日本)

注

- (一) 和辻哲郎氏「日本精神史研究」の「源氏物語」について
て「岩波書店大正十一年十一月
- (二) 今井源衛氏「源氏物語」の形成——帯木巻頭をめぐって——
国文学「解釈と鑑賞」第五九卷三三号・平成六年
- (三) 宋の趙令時作「崔鶯鶯」(商調蝶恋花：鼓子詞)「侯増録」
巻五所収(明芸文書院刻本)
- (四) 大庭修氏「東北大学狩野文庫架蔵の御文庫目録」『関西
大学学術研究所紀要』第三輯所収昭和四五年三月
- (五) 田辺爵氏「伊勢竹取に於ける伝奇小説の影響」『國學院

雑誌』第四〇巻昭和九年十二月

(六) 目加田さくを氏「物語作家圏の研究―その位相及び教養よりみたる物語の形成―」第八章の第一節「歌物語の先蹤」バストル社昭和三十九年七月

(七) 上野理氏「伊勢物語の使考」『国文学研究』(早大) 第四十一号昭和四十四年十二月

(八) 片桐洋一氏「伊勢物語の新研究」の第二章「伊勢物語の始発―第六九段をめぐって―」明治書院昭和六二年九月川口久雄氏「日本の漢文学史の研究」の第十九章の第六節「源氏物語の素材における中国伝奇小説その他の投影」明治書院昭和三十九年五月

(九) 重松信宏氏「源氏物語の構想と鑑賞」の第三章の第二節「源氏得意時代の物語」風間書房昭和五七年三月

(十) 玉上卓爾氏「源氏物語評釈」第一巻角川書店一九八〇年

(十一) 大野晋・丸谷才一氏対談「光る源氏の物語」上「空蟬」『夕顔』中央公論社一九八九年八月

(十二) 河添房江氏「源氏物語」の性と文化―アンドロギヌスとしての光源氏』『文学』六巻第四号岩波書店一九九五年

(十三) 先掲大野晋・丸谷才一氏対談「光る源氏の物語」上同書

(十四) 先掲田辺鷹氏・目加田さくを氏・上野理氏・片桐洋一氏諸論による。

(十五) 福田陸太郎訳マリウス・フランソワ・ギュイヤール『比較文学』白水社一九五三年

(十七) 『太平廣記』巻第四五二に「任氏」として収録される

(十八) 新間一美氏「もう一人の夕顔」『草木三帖と任氏の物語―源氏物語の人物と構造』所収笠間書院昭和五七年五月

(十九) 拙稿「源氏物語と唐代の伝奇小説―夕顔・未摘花・六条の御息所・浮舟物語と霍小玉伝」『甲南国文』第四十三号(平成八年三月)

(二十) 先掲和辻哲郎氏「日本精神史研究」同書